

米大統領選

トランプ氏遊説視察記

熱意欠くトランプ氏と支持者、敗北を受け入れつつある印象

11 月 8 日の米大統領選本選まであと 13 日。今回は 10 月 22 日にバージニア州バーチンビーチで行われた共和党候補ドナルド・トランプ氏の遊説の視察記を報告する。選挙戦の最終盤でクリントン氏がリードを広げて勝利が確実になるなか、熱意を欠くトランプ氏の演説は敗北の受け入れを示唆し、支持者にもあきらめムードが広がっていた。



1. 敗北不可避のトランプ氏が唱える「世論調査不正説」に注目

最終盤の選挙戦は、民主党候補のヒラリー・クリントン前国務長官が共和党候補のドナルド・トランプ氏に水をあげ、勝利が確実な情勢である。全米対象の主要世論調査の平均支持率で見れば、最近ではクリントン氏のトランプ氏に対するリードは 6 ポイント前後に広がっている。州別の世論調査による獲得選挙人数の予想でも、クリントン氏は勝利に必要な過半数 270 人を大幅に上回る 320~350 人に達する勢いである。どちらも現時点では大差である。本選までは残り 2 週間を切り、3 回のテレビ討論会は全て終了していて、しかも全有権者の約 4 割が行うとみられる期日前投票は既に始まっているからである。トランプ氏と陣営が確信しているという逆転勝利を、残された時間はあまりに少なく、極めて困難である。

ここにきて筆者が注目しているのは、トランプ氏がクリントン氏の優勢を伝える世論調査やその報道の不正を強調し始めたことである。トランプ氏は目の前に迫ってきた敗北を受け入れたくないから調査結果の否定に走ったのなら、問題視する必要はない。この時点で自分への支持が勝利には足りないとの自覚があるゆえの現実逃避であり、2 週間近く後に敗北という現実を受け入れるだけだからである。問題は、トランプ氏が自らの選挙運動を通じて多くの有権者からの支持を得たと確信し、自信を持って世論調査が誤っていると主張している場合である。筆者は多数の調査機関が異なる方法で独立して行う世論調査の平均値に歪みがあるとは思わない。現在の主要世論調査の結果どおり、13 日後の本選ではクリントン氏

が順当に勝つと予想している。だが、トランプ氏が現時点で多くの支持と勝利を確信しているなら、本選で敗れても選挙結果に不正があると訴えてすぐに受け入れない恐れがある。

トランプ氏の不正説の裏にあるのは、現実逃避か確信なのか。意外だが、それを確かめられる簡単な方法がある。実際にトランプ氏の遊説や集会に行って、多くの支持を得ていると確信するほどの動員を実現できているのか、会場が盛り上がっているのかを自らの目で確かめればよいのである。そこで筆者は、ちょうど 10 月 22 日にワシントンに隣接するバージニア州の南部バージニアビーチで行われると発表のあったトランプ氏の遊説に足を運んで検証することにした。

2. 勝ち目のないバージニア州での遊説にこそ表れるトランプ氏の本音

バージニア州は 2008 年、2012 年はオバマ大統領が連勝したが、それ以前は 40 年余り共和党候補の勝利が続いた同党の強固な地盤、いわゆるレッド・ステートだった。またオバマ大統領が勝った 2012 年も、共和党のロムニー候補との得票率差は 3.9%と僅差であった。このため、今回の同州も序盤まではクリントン氏とトランプ氏の激戦が予想されていた。

しかし今年 8 月以降の同州では、クリントン氏が最もトランプ氏に追い上げられた 9 月後半でも 4 ポイント強の差を守るなど一貫して優勢を保ち、最近は一リードが 8 ポイント前後まで開いている。もはや激戦州ではないのである。人口増加率の高いワシントン近郊の同州北部は民主党支持者が多い上に、共和党が優勢の同州南部もクリントン氏が副大統領候補に同州元知事で南部が地盤のティム・ケイン上院議員を選んだ効果が表れた模様である。逆にトランプ陣営は劣勢を挽回できず、一時は陣営の同州からの撤退観測も報道されたほどだった。

それだけに、10 月 22 日にトランプ氏がバージニア州南東部バージニアビーチで遊説を行うとの発表は、共和党内でも意外に受け止められた。本選まであと半月余りなのに、貴重な時間を勝ち目のないバージニア州で費やすトランプ陣営の戦略が分からないということである。キリスト教福音派の支持者や軍関係者の支持のつなぎ止めという見方もあったが、それだけでは逆転は望めないほどクリントン氏のリードは大きいことも事実だった。

とはいえ、筆者にはこの時期のバージニアビーチの遊説は、視察対象として最適に思えた。バージニア州はトランプ氏の支持基盤である白人労働者階級が多いペンシルバニア州やオハイオ州のようなラストベルト（さび付いた工業地帯）ではない。バージニア州南東部のバージニアビーチとその周辺地域は、キリスト教福音派や軍関係の共和党支持者の住民が多い。そのため、この遊説は共和党候補であるからトランプ氏を支持する聴衆が多数を占めることが予想できた。遊説の視察目的はトランプ氏がどれだけ支持を拡大できているかの検証だから、対象はバージニアビーチの方がトランプ氏の熱狂的な支持者が多いラストベルトよりも適しているのである。筆者はトランプ陣営のサイトで遊説への参加登録を前日に済ませ、22 日午前には遊説会場のバージニアビーチのレジェンド大学に向けてワシントンを出発した。

3. 多くない聴衆、「嘆かわしい人々」の連呼、著名人の応援演説はジュリアーニ氏のみ

トランプ氏の遊説は22日の午後3時から1時間と告知されていた。ワシントンからバージニアビーチまでは約320キロ、運転の所要時間は約3時間半とみて午後2時到着を目指したが、途中で予想外の渋滞があり現地到着は午後2時40分過ぎになってしまった。これだけ遅いと会場は既に満員で入れてもらえないかもしれないと危惧したが、杞憂だった。大学周辺の道路は渋滞していたが、大学構内の駐車場は空きが目立つ。会場手前に設置された金属探知機等に並ぶ人の列も短く、午後3時前には会場に入ることができた。会場は屋外で仮設ステージが設置されているだけで、登壇者の後ろにはトランプ氏の選挙運動でおなじみの“MAKE AMERICA GREAT AGAIN”と書かれた弾幕が掲げられているだけ。観覧席を設けるなどテレビ中継を意識した演出はなされていない。会場も聴衆は大勢だが、スペースを埋め尽くすほどの混み具合ではない。主催者予想の動員は数千人という記事も見かけたが、実際の参加者はそれより少なそうである。



イベントが始まると、最初は地元選出の議員などの応援演説が続いたが、その中でよく出てきたフレーズが、“We are deplorable.”（私たちは嘆かわしい人々）だった。クリントン氏が9月に集会での「トランプ支持者の半分は嘆かわしい人々の集まり」との発言への反感の表れである。クリントン氏としては、トランプ氏の支持者の中の「人種主義者、性差別主義者、同性愛者嫌い、外国人嫌い、イスラム嫌い」の人々への批判だった。だが、結果として共和党支持者の9割近くに達したトランプ支持者全体が、クリントン氏から「嘆かわしい人々」と批判されたとして反感を持ち、反クリントンの意識で結束してしまった。クリントン氏にとっては今後、大統領就任後の共和党支持者との関係にしこりを残す恐れもあり、非常にコストの高い失言になってしまった。

しばらくすると、メディアに頻繁に登場してトランプ氏を擁護しているジュリアーニ元ニューヨーク市長が登壇した。トランプ氏への支持を呼びかける演説というよりは軽妙な漫談である。注目すべきことは、その内容ではなくこのイベントでの著名な登壇者がジュリアーニ氏の他にいなかったことだろう。クリントン氏に水をあけられたトランプ氏が、共和党候補でありながら同党指導部などに見限られ、上下両院の現職議員との連携もできずに副大統領候補のペンス・インディアナ州知事とトランプ氏の家族、わずかの支援者しか頼りにならないという孤独の戦いを余儀なくされている表れなのである。民主党候補のクリントン氏



は、副大統領候補のケイン上院議員はもちろん、夫のビル・クリントン元大統領と娘のチェルシー・クリントン氏、オバマ大統領夫妻、バイデン副大統領夫妻、エリザベス・ウォーレン上院議員、予備選で競ったバーニー・サンダース上院議員など有権者に人気のある党内の有力者の応援を連日受けている。その差もクリントン氏の大きなリードの一因だろう。

4. 熱意欠くトランプ氏の演説、支持者にもあきらめムード

その後、しばらく間を置いてトランプ氏が登壇して演説を開始した。この日のトランプ氏は用意した原稿を読む演説であったが、それにしても声が小さく、おとなしい印象を受けた。演説内容も新味がなく、不法移民対策、テロ対策、保護主義を前面に出した通商政策、それと大型減税で4%成長を実現するという経済政策などを淡々と語っていく。聴衆の拍手や歓声も遅れ気味で途切れることが多い。トランプ氏と支持者の双方の発言や反応から感じ取れるのは、熱意の乏しさであり、クリントン氏に水をあけられて敗北は不可避と認め始めているかのようなあきらめムードであった。



トランプ氏の演説は公約の表明が終わると、いつもどおりのクリントン氏に対する非難に移ったが、それでも歯切れが悪い。トランプ氏が第3回テレビ討論会と同じように、罪を犯したクリントン氏の立候補が不正と非難すると、聴衆からは“Lock her up!”（クリントン氏を拘留せよ）というお決まりの掛け声は上がったが、声を出しているのは一部だけですぐに途切れる。主要メディアが報じたオハイオ州やアイオワ州でのトランプ氏の聴衆を煽る大声の演説とは異なり、単調である。熱気を生む候補も熱狂的な聴衆もいないのである。



最後まで熱意を欠いた様子で演説を続けたトランプ氏は、演説を終えると支持者との握手など交流の場も持たずに、すぐにステージ裏へと去った。その後のスケジュールもあったのだろうが、トランプ氏にバージニア州での逆転勝利に賭ける意欲がどこまであるのかを疑わせる対応だったことは否めない。結局、演説の最初から最後まで感じさせたのはトランプ氏と支持者の熱意のなさであり、本選までわずか半月余りの時点でクリントン氏に水をあけられ、不可避になった敗北をトランプ氏、陣営、支持者が受け入れ始めたことである。

5. 世論調査不正説は本選敗北の現実逃避、敗北受け入れで不要に

また、今回の遊説では最近トランプ氏が唱え続けてきた選挙不正の訴えがなく、世論調査・報道の不正説への言及も僅かだったという変化があった。これも、トランプ氏が本選の敗北を受け入れ始めたからだだろう。トランプ氏の「世論調査不正説」の裏にあったのも現実逃避であり、今回のバージニア州の遊説では同州で勝ち目がなく、本選も敗北を受け入れ始

めたから不正説を唱える必要がなくなったと解釈できる。

それでは、週明けに激戦の続くフロリダ州に移ったトランプ氏が、おとなしかったバージニア州の演説から一変して、再び世論調査とメディアの不正説を強調しているのはなぜか。これは、トランプ氏が敗北を受け入れて大統領選を続ける士気を失ったのではなく、目標を本選勝利から惨敗回避に移し、自分の面目を守るための戦いに切り替えた結果と思えばよいだろう。惨敗回避にフロリダ州は負けられないし、勝算はあるとトランプ氏は思っている。しかし同州の世論調査はクリントン氏リードという結果が多く受け入れ難いから、再び不正説を訴えたのだろう。

おそらく今後のトランプ氏は面目を保つための惨敗回避にこだわり、残った激戦州では熱心に選挙活動が続けるだろう。その州での世論調査においてクリントン氏がリードしている場合、全米調査のクリントン氏のリードが目立っている場合に限って、トランプ氏は不正説の訴えを強めてくるだろう。ただ、それも惨敗回避のための限定的な動きであり、大統領選本選に勝利できるだけの支持を獲得したとの自信からの訴えではない。2 週間後の本選でトランプ氏は敗れる見通しだが、投票結果の受け入れを拒否することはないと思われる。

6. 遊説会場で分かる女性のトランプ不信、本選敗北の主因となる可能性も

今回視察したトランプ氏の遊説は、バージニアビーチという一地域の選挙戦の一部に過ぎないが、そこには全米の本選に生じている重要な変化もいくつか読み取れた。

一つは、露見したトランプ氏の過去のわいせつ発言が、女性のトランプ氏への不信を通じて同氏の本選敗北の大きな要因になりそうなことである。トランプ氏がかつて共和党の地盤であったバージニア州で今回はクリントン氏に大差をつけられている原因の一つとこの遊説で筆者に思わせたのが、女性のトランプ氏への不信である。露見した 11 年前のトランプ氏のわいせつ発言、その後に 10 人以上の女性がトランプ氏のわいせつ被害を受けたとの訴えに対して、トランプ氏は発言をロッカールームのたわいない会話、女性の証言はうそとそれぞれ片付けようとした。しかし、世論調査では多くの女性がトランプ氏の女性蔑視の表れと受け止め、女性のトランプ氏支持の低下が目立っている。今回の遊説では、メディア向けに女性のトランプ支持の挽回を印象付けようとしたのか、“WOMEN FOR TRUMP”というピンク色のプラカードを持つ女性こそ目立ったが、演説では聴衆からの掛け声は男性ばかり、筆者の周辺の女性の拍手はまばらだった。また、高齢の女性がトランプ氏の演説の途中で帰る例も少なくなかった。



こうした現実をみると、わいせつ発言等を経た女性のトランプ不信は世論調査に示されるよりも実態は深刻といわざるを得ない。トランプ氏のバージニア州での逆転勝利には女性

の支持拡大が不可欠だったのに、同氏は逆に敬遠される発言を重ねて同州の勝利をクリントン氏に譲ってしまった。

女性のトランプ不信に起因するトランプ氏の支持停滞・低迷はバージニア州限定ではなく、多くの激戦州はもちろんそれ以外の州でも広く生じていて、選挙戦終盤でのトランプ氏の失速をもたらす大きな一因になったと思われる。実際、接戦に戻る兆候のあったラストベルトのペンシルバニア州は、最近クリントン氏が優勢になった。共和党の地盤州も例外ではない、アリゾナ州ではクリントン氏がリード、ジョージア州やテキサス州ではトランプ氏にクリントン氏が僅差に迫るという 2008 年、2012 年にもなかった事態が起きている。さすがにジョージア、テキサス両州はトランプ氏が制するだろうが、共和党は震撼しているだろう。

7. 予想以上に強まっている共和党支持者の内向き指向

今回の遊説で表れたもう一つの重要な変化は、共和党支持者の内向き指向の強まりである。淡々と進むトランプ氏の演説の中で聴衆が最も盛り上がったのは、イスラム過激派を米国内に入れるな、メキシコ国境に壁を建設しよう（Build the wall!）というトランプ氏の発言とそれに対する聴衆の反応だった。軍関係者も多い地域でこの反応は意外であり、筆者は共和党支持者に広がるといわれる内向き指向の強さを認識させられた。

問題はトランプ氏が大統領選に敗れて政治から撤退しても、同氏の支持者に多い内向き指向は残り、上下両院の同党議員もその影響を強く受ける可能性が高いことである。今後、民主党のクリントン新政権が誕生してオバマ政権よりも米国が世界の警察官の役割を担うなど、米国の世界への関与を深めることに積極的になろうとしても、議会と世論の両面で共和党とその支持者から抵抗を受けて前進が難しくなることが多くなりそうである。

8. 選挙戦大詰めで敗北受容のトランプ氏、議会選の共和党に悪影響及ぼしそう

今回の遊説が示唆する選挙戦の最終盤でのトランプ氏の敗北受容と熱意の低下は、大統領選にとどまらず、議会選にも響く可能性がある。既に議会の共和党指導部はトランプ氏を見限り、上下両院の現職議員に自らの選挙戦に専念するように求めているが、大統領候補のトランプ氏との連携効果が期待できないだけでなく、敗北が確実で大敗もありうる候補、女性に広く不信感を持たれたトランプ氏を大統領候補とする共和党の上下両院の候補が受ける逆風は弱くないだろう。

しかも議会選で対決する民主党は、逆に大統領選の最終盤で勢いを得たクリントン氏が、民主党の上下両院の多数派奪還を目指して議会選の民主党候補の支援に動きつつある。また、前述のクリントン氏を応援してきた民主党で人気のある有力者が、接戦になっている上下両院の民主党候補の支援にも動き始めた。

逆風を受ける共和党候補と追い風に乗る民主党候補の環境の違いは、議会選まであと 2 週間と時間は限られているとはいえ、接戦の州や選挙区の勝敗を大きく変える可能性がある。上院は民主党が多数派を奪還する可能性が高まっている。共和党の現議席数が多く逆転はあ

りえないとみられていた下院も、既に両党の議席数の差は相当縮まるとの見方が強まっているし、今後さらに全般的な情勢が共和党不利、民主党有利に傾けば、民主党の多数派奪還も否定できなくなってきた。

残り2週間、今後は大統領選でクリントン氏の圧勝がありうるか、下院が接戦になってきた議会選の行方とともに注目して報告していくことにする。

以上／今村



本資料は公開情報に基づいて作成されていますが、丸紅米国会社ワシントン事務所（以下、当事務所）はその正確性、相当性、完全性を保証するものではありません。

本資料に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するもので、当事務所は何らの責任を負うものではありません。

本資料に掲載している内容は予告なしに変更することがあります。

本資料に掲載している個々の文章、写真、イラストなど(以下「情報」といいます)は、当事務所の著作物であり、日本の著作権法及びベルヌ条約などの国際条約により、著作権の保護を受けています。個人の私的使用および引用など、著作権法により認められている場合を除き、本資料に掲載している情報を、著作権者に無断で、複製、頒布、改変、翻訳、翻案、公衆送信、送信可能化などすることは著作権法違反となります。